

12月号

昭和56年12月1日
編集／発行
岡崎市教育委員会

全身に、期待と不安をみながら
土を掘りおこす手、手、手
力をこめて、イモづるを引っこ抜く
イモは、できているだろうか
一瞬、真剣なまなざしに不安がよぎる

「あつた」

「先生、こんなに大きいよ。」
歡喜に満ちた顔、顔、顔

泥にまみれた手が、素足がたくましい
来年は、もつとたくさんつくぞ

さあ、次はみこしづくりだ
収穫祭も近いぞ



(学校農園でのいもほり—矢作西小)

—教育随想—

自然に学ぶ

山本忠男



人の心を育てる手伝いはしたが、まだ物を作り出す営みはしていなかった。閑を得てがらにもなく家庭菜園を始めた。経験者に笑われそうだが自然に学んだものの一、二を我田引水的にのべたい。

● 自然のままにほかっておく
伸びよ拡がれ地に満てよとしろとの浅はか、一坪ほどの所にきゅうり、トマト、なす、かぼちゃ、ピーマンと植え、早く実がなれカボチャドンとせつせと水をかけ、肥やしをやったら、ムクムクムクと大きくなり、ついに私の背丈をオーバーした。何れも何れも縦横無尽、どこが先やら根元やら、まったく八幡の藪しらずみたいになつてしまった。うわあ、こんなにならぬうちに「摘心」しなくちゃいけないかと思つてももう遅い、自然という奴は何とまあ傍若無人、勝手きままなやつだな收拾のつかない作物をみてあげられた。つくづく、生き物というものは

ちよつとよい成育条件を与えると、とてもない我慢の根をはり、我欲の葉を繁らすものだと思つた。こんなになつてからではもうおそい。今下手に切る角をためて牛を殺すのとえ、花もなかなか実も結ばないかもしれぬ。小さい時放つておかずきちんと方向をもたせて余分なものはちゃんと矯めて育てないといけない。天道と人道と、自由と放ラツ、我ままと勝手と、私は作物からこんなことを教わり心にしみた。

● 自然の節理の小天地
大根をまき少し大きくなつたらちゃんともんしろが来て卵を生みつけ葉をみんな食べられてしまった。ほんとによく知つているものだ。おこつて殺すと他花の授精にさしさわる。よく見るとおるわおるわ、うりにうりばえ、なすにてんとう虫だまし、黄金虫、葉をくい破つたり穴をあける。ある日何気なく元氣のないピ

ーマンをみたら、二三十匹の害虫が数珠つながり、驚きあきれて片っぱしからつかみとり水中へ、おそらく茎に管を差しこみ養分を吸うのだろう。葉がちこまつてしおれている。今だに後遺症が歴然だ。もうよしと思つてあくる日いくとまた沢山、これでもかこれでもかと根気くらべ、ある日のこと相当高い枝の上に二匹の蛙が鎮座している。はてこんな所に赤蛙が？と思つた瞬間、ああ、そうかこの赤蛙たちは下からあがつてくるこの害虫をこうしてここで待ちかまえていて、その長い舌で一呑みにしようと思つた。私耽として狙つているのだと思つた時、私はなるほどなとうなずいた。アフリカのライオンと縞馬の弱肉強食の世界がはるかこの地球上の我が家のこの小天地にも歴然としてくりひろげられているのだ。

私が大切に育てている作物を台無しにしてしまう害虫もあればまたそれをわらう赤蛙たち、畑のすみには大きな蛇のぬけがらもあつた。自然界のこの節理とパランス、あれにより生き、これにより食われる弱肉強食の世界が植物、動物にわたつて静かにしかも自然にこの小さな天地で行なわれている。弱肉強食の世界のこの冷厳な自然を見すえた時、私はなまじいにへたなさかしらのある動物として生きていくが故に人界世界が最も激烈なきびしい弱肉強食の自然の世界であるなど感じた。自然はいつも書かざる無言の経をくりかえして私に色々なことを教えてくれる。
(元東海中長)



ランデブーフライト

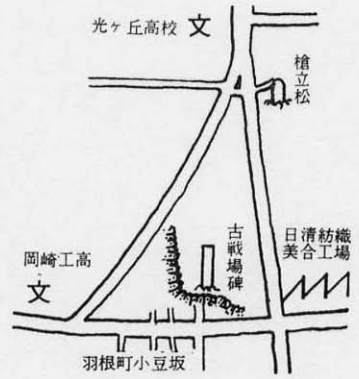
金子 一元

ヨセミテ国立公園、面積にしておよそ神奈川県ほどあるというのだから、飛行機で訪れるには、たいへんふさわしい。前日ジャンボ機で舞い降りたばかりの地を、今度は十人乗りの軽飛行機で飛びたつのだ。いろいろな飛行機に乗れるぞと、めずらしがりやの心はおどつた。

ヨセミテはアメリカが誇る公園の一つで、氷河の浸食の成せる技とはいえ、それは一けたも二けたもちがうスケールの大きさに、ただ興奮するばかりだつた。

広大なヨセミテをあとにし、マリボサ空港から我々四機の軽飛行機は次々と飛びたつた。眼下にはどこまでも大地がなだらかに起伏している。

先に離陸した一番機が眼前に迫つた。振り返ると、我々の二番機のとあとに三番機、四番機がすぐ手の届きそうな所に続いている。横一列の編隊になつた。「シヤッターチャンス」と若いパイロットは叫ぶ。斜め一列、縦一例と編隊を組み変えた。四機のランデブーフライトに心お



—ふるさとの山河—

小豆坂

羽根小前の県道を東へ進み、県立岡崎工業高校を過ぎると、美合方面と男川方面へ道が分かれる。このあたりの丘陵地を小豆坂と呼ぶ。

「小豆坂の土には、合戦で死んだ人々の血がしみこんでいる。雨が降ると、土が小豆色に染まって流れ出す」という伝説にある通り、赤土でおおわれている。しかし、赤松の木立ちや雑木の繁る丘陵地がけずり取られ、宅地や工場用地に変えられた今、伝説のような戦いがあった地とは思えない。このような戦いがどうして起きたのだろうか。その思いをめぐらしてみたい。

天文十一年（一五四二）、松平清康の死後、織田信秀は安祥城、刈谷城を落とし、一挙に岡崎城を全滅させようと三河に打って出た。そこで、松平広忠はこの危機を乗り切るために、幼い竹千代を人質として今川氏に助けを求めた。今川義元はこの機に乗じ、岡崎城を配下にと野

望を秘め、四万の大軍を指し向けた。織田信秀は矢作川を越えた地（現在の上和田町）に陣をしき、攻撃を開始した。そして、両軍がぶつかった所が小豆坂である。

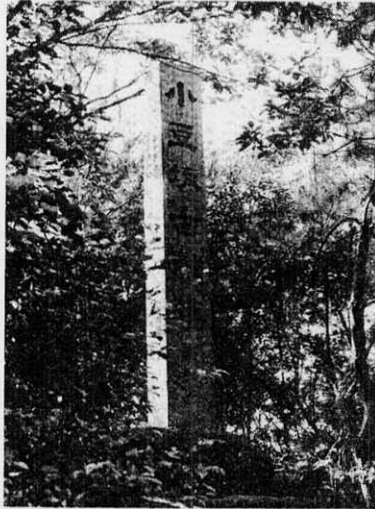
この合戦には数多くの言い伝えが残っている。今川軍四万に対し、織田軍は僅か四千であった。数からみても織田軍に不利なことは明らかであった。予想どうり戦いが始まると、たちまち織田軍は苦戦の連続で後退せざるをえなくなつた。その時、すさまじい勢いで槍をふりかざし、「今川義元いずこに、織田の魂を見せてくれよう」と、今川勢の陣に突入した武将がいた。ひとりとは織田信光であり、もうひとりとは織田信房であった。これを見た織田勢は勇気百倍、一丸となつて攻め立てたことから、たちまち劣勢をはね返

してしまつた。

このまま戦いが進めば、織田軍は万に一つの勝利を得たかもしれない。ところが今川軍が浮き足立った時、横合いから勇ましいかけ声とともに、織田軍に襲いかかったのが松平勢であった。竹千代を人質にとられ、苦しい思いを内にこめた松平軍の兵には、鬼をも倒す気迫がみなぎっていた。これにはさすがの織田軍も、再び後退する破目となつた。

こうしてこの戦いは一進一退を続け、結果的には今川義元は遠征に失敗し、織田方も数多くの武將をなくし、得るものはあまりなかつた。しかし、ここに忘れてはならないものがある。大きな大名の間にはさまれ、何とか生きのびる道を探し求めた松平一族の悲しい姿である。小豆坂の古戦場は、今川と織田との戦いの跡であるとともに、小大名松平氏の生きざまの縮図ともいえるよう。

（羽根小 熊谷洋子）



どるが何せ大空でのこと、緊張そのもの。サンフランシスコの空港に着陸した時にはカメラを持つ手はじっとりと汗ばんでいた。

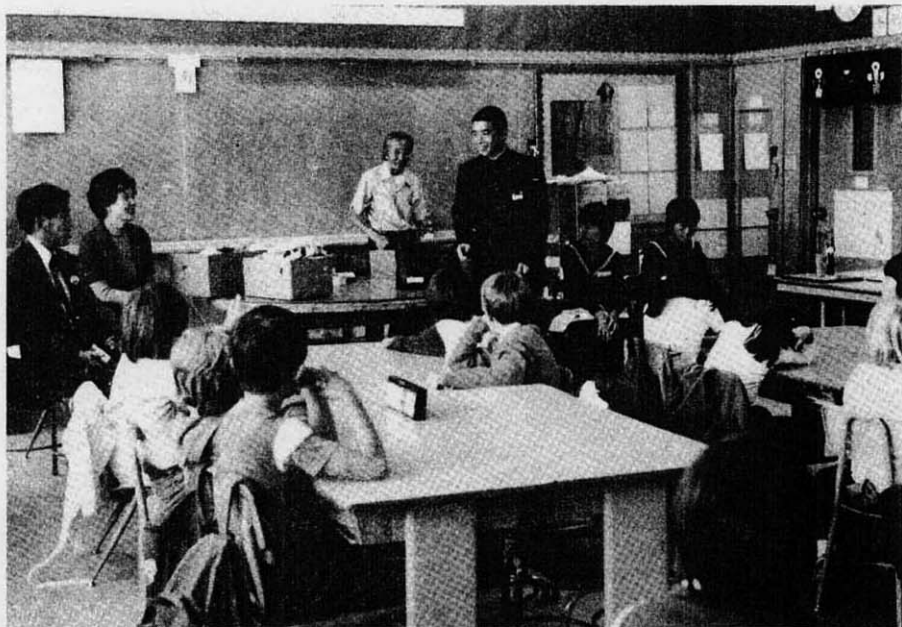
旅の収穫

塚本 麗子

（竜美丘小）

アメリカ西海岸の印象がコバルトブルーだとすれば、北欧十三日間の印象はセピア色ともいおうか。古い石畳も、チヨコレート色のレンガの建物も、緑銅の塔も、その一つ一つが歴史の匂いに満ちて、浮き立っているはずの私の胸を重くしていた。それは、陰うつな重みではなく、広いけれども豊かとは言えない土地や、恵まれていたとは言えない気候の中で生き抜いてきた人間達の生の重みだった。オスロからレアゲル、ベルゲンのツアーで、ミセス、マサというガイドに出会った。戦前に日本でノルウェーの方と結婚され、戦争中はずい分と苦労された様子。矍鑠とした話しぶりや、頑固とも思える横顔は、何かしら異国の地で生きていくことの厳しさを物語っているように、雄大なフィヨルドの中にあつても、決してひげをとらない大きさを感じた。アメリカではグラントキャニオン、カナダでは氷河、そして今回はフィヨルドと、それ一つを見ただけに出かけた旅ではあつたが、まるで形のない不思議な収穫に、我ながら満足している。そんな秋の夜長である。

（岩津小）



昨年ウッデバラ訪問に続いて、本年はアメリカ西海岸都市を中心に「中学生親善使節団」が派遣された。

岡崎市中学生代表、三浦淳一郎君（美川中）浅井千加子さん（葵中）中野渡由美子さん（南中）の三名は稲垣博先生（城北中）藤井清先生（市教委）とともに十月十五日、東京を出発、サンフランシスコ、ロスアンゼルス市内の学校や家庭を訪問し、親善交流を深めた。

アメリカ 中学生の親善使節②

- ① サンフランシスコ市役所
- ② 黄線一本のアメリカとメキシコの国境
- ③ 機内で単語を並べて懸命な英会話
- ④ 中学生の家庭科作品
- ⑤ 完全装備で技術科の実習をする中学生
- ⑥ 生徒のプレゼントに「ビューティフル」連発の女性小学校長
- ⑦ 片言の英語で小学生と雑談
- ⑧ ホームステイ食後の団らん（日系人のイワモトさん宅）
- ⑨ 校長、生徒に迎えられた中学校訪問

訪問校

- ・ マリーナ デル イレ中学校
- ・ クラレンドン小学校





(三浦淳一郎)

●「温暖・広大」 環境は人をつくる。まさしく、アメリカ人は、底ぬけに明るくおやかである。初対面ながら、*Let's meet you.* の言葉と共に、万面に微笑を浮かべ手を差しよべる。温かった。生徒も自立心が強く活発だ。自由の中にも、人に迷惑をかけないマナー、*Excuse me* と自然に口に出る。感心した。

この緊張と感動の日々は、終生忘れることはない。(稲垣 博)

●アメリカを訪問して、とにかく広く大きいことが印象的だった。

たとえば道路、日本の国道一号線ぐらいの道が一方通行だったり、片側五車線のフリーウェイが町の縦横に走っていた。ベイブリッジのように二階建ての道路など本当によく整備されており、さすが自動車王国だと感心した。



(中野渡由美子)

●陸続きの国境を越え、メキシコへ行った。小さな少年と少女がやって来た。大きな瞳で私を見上げ、ガムを差し出した。思わず「ノウ」と答えた。彼らは寂しそうに帰って行った。なぜガム一つぐらい買ってやらなかったんだろうと、後悔の思いでいっぱいだった。たった一本の黄色い線でこんなにも様子が変わるのが不思議だった。(浅井千加子)

●小学校を訪問すると、一人だけ友達から離れて、ついたての中で黙々と勉強している子がいた。他人にわずらわされないで勉強したい、とのことだった。周りの眼など気にせず、自分自身が納得できる事をする学習態度に感心した。

自分では少し周りの人に振り回されすぎているのではないかと反省し、もっと自分の意志を大切にすべきだと思った。



7



6



9



8

給食指導

むずかしいなあ

広幡小 千賀三枝子

キンコン、カンコン、チャイムと同時に教室をどび出して、手を洗いに行く子どもたち。消毒係が消毒液を用意する。机ふき係が、みんなの机をふいて回る。給食係はもうエプロンをつけている。

いつもながらの給食開始風景である。たとえ一年生でも、教師はなるべく直接手を出さぬように、子ども達だけでやれるように、を心がけてきたつもりである。一週間交替の当番では、仕事を覚えたころ、次の当番に変わるといふことになりかねないと考え、当番制でなく、一学期間、十二名の者が係活動として行っている。初めの一週間はとまどつていた子どもも、二週目からは、何をどうやったらよいかかわかっている。自分の仕事をさつさとやれる。三学期までに三十六名全員に給食係が一まわりするようにしたいと考えている。

「いただきます」

さあ、給食だ。食べ出すと、食欲にぐつと差が出る。小柄で

野菜の嫌いなH君は、パンはよく食べる割に、サラダなどはいつこうに減らない。

「体にいいんだよ」

などと言つても、

「ぼく、これくらいい」

の一言。Iちゃんのはのんびりやグループの友だちと楽そうにしているが、なかなか給食を口に運ばない。グループの友だちは時間内に食べられるのに、Iちゃんには、いつまでたつてもマイペース。H君にしろ、Iちゃんにしろ、食物に対する飢餓感が全くない。胃袋が小さいのか、豊かな時代に生まれたせいなのか。

担任は、くいしん坊だ。

「先生には、一番初めに、一番たくさん」



と、言つてある。どんな献立の時も、おいしそうに食べなければ……。担任につられて、くいしん坊連がおかわりをするので食缶はいつもからっぽになる。食物の豊かさが、食物を粗末に扱つたり、感謝しなくなつたりして、人の心を貧弱にするとは考えたくない。HやIの指導、あせらずして、しかも着実に：がんばれ！（我を励ます声）

教育日々



七人の仲間

福岡中 近藤 博之

本校水泳部に入ってくる生徒は、（水泳部に入れば泳げるようになるだろう）という理由で入部する者がほとんどである。部活であるからには、なんとか勝ちたいと思うのであるが、毎年入部する生徒を見るたびに、なんとも言えない気持ちにさせられてしまう。

彼ら七人も例外にもれず、ほとんど泳げない者ばかりであつた。

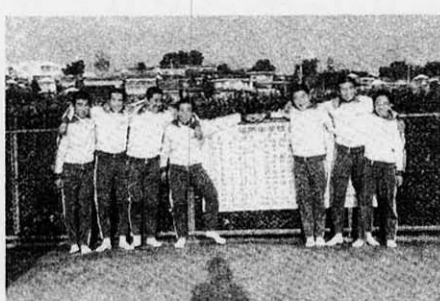
水が冷たいせいもあるが、二百米を泳ぐのに、速い者で四分、遅い者にいたつては十分もかかる始末であつた。しかし、せつかく入部してきたのだから、（卒業までになんとか四種目泳げるようにさせる）という目標を持つて練習させることにした。

岡崎の水泳のレベルは高く入賞することは無理と思つたのである。

本校では、一年生の八月までは全員クロールの練習をする。最も速く泳げるクロールをマスターさせて、記録に対する興味を持たせるためである。

八月に入つてからは、個人メドレーを中心に練習をしていく。毎日八千強化訓練では、一万二千ほどの練習をこなしていく。八月が終わるころには、なんと四種目泳げるようになるのである。

一年をすごして、彼らの泳力の向上は自分の予想を大きく上回るものであつた。それは、彼ら七人がいつでも行動を共にし互いに励まし合い、競い合ったためである。



会全員出場であつた。六人はなんと出られそうである。あと一人がなかなか標準記録を突破できない。一人黙々と練習する彼の姿に（みんなと一緒に）という思いが切々と感じられた。やがて、彼の努力は実り、市長杯大会では西三大会出場の権利を勝ち取つたのである。彼と彼らの喜びは格別のものであつたと思う。

本校では、各種大会で優秀な成績を取めた者には、福中賞として賞状と金メダルが与えられる。

彼らの努力と団結が西三大会男子総合三位という成果をもたらした。卒業式の前日に、彼の胸に輝く金メダルの姿を、心待ちにしている毎日である。



第八回教育文化賞

三氏一団、晴れの授賞

去る十一月十四日(土)第九回教育文化賞授賞式が、竜美丘小学校で行われ、次の三氏一団に表彰状と副賞が、中根市長と尾崎竜城RC会長から贈呈された。

〔個人〕

▽都築照元氏53歳(甲山中教諭)

昭和四十四年、東海中学校に勤務したのを機会に、史跡の調査に本格的に取り組み、次の三冊の著作を刊行し、岡崎の史跡のほりおこしと紹介に努めた。

〔岡崎東海風土記〕(昭49年刊)

〔岡崎の史跡建造物〕(昭52年刊)

〔岡崎の石仏〕(昭56年刊)

▽伊藤正夫氏71歳(岡崎市洞町五位原一) 昭和四十八年、市郷土館に保管されている土器の

〔寄贈刊行物・資料等〕

◆矢作川流域一万年の歴史と文化を探る No.2 開発研究会

◆研究集録 第十四集 現職教育家庭科部会

◆力いっぱい 常盤南小学校 ◆常南生物の観察の手引き

常盤南小学校 ◆心をむすぶ 矢作北小学校

◆太陽と土に親しみ自ら運動に励む子の育成 井田小学校

◆自然と子ども 竜美丘小学校

◆学習指導案様式(試案) 広幡小学校長 内田松夫

復元に手を染めて以来、独自の技術を開発し、文化財保存に貢献する。主な復元土器に、東郷遺跡の広口短頸壺、真宮遺跡の甕棺、大甕、岩津一号墳の裝飾須恵器などがある。

▽吉田忠一氏73歳(岡崎市巾中町大門通四) 六十六歳の誕生日を記念して「希望図書館」を私財を投じて開設し、その充実に努める。昭和五十三年市教育功労者。現在、三室、五十四平方メートル、図書三千冊を有し、青少年の読書活動を推進して、青少年の健全育成に貢献している。

▽生平地地唄保存会(保存会会長 杉田孝吉) 昭和二十六年生平に伝わる地唄を復活奉納

晴れの授賞

した。以来、地唄唄保存会を結成し、三十年に亘って、棟木唄綱持ち唄、祝長持唄、さいなでやろか、そろばん木遣りなどの伝承と上演に努め、地域の団結やコミュニケーションにも大きな役割を果たしている。

これで、第一回からの受賞者は、個人二十二氏、団体十九となる。

授賞式では、保存会のみなさんにより「地唄唄」が披露され、式をいっそう盛り上げた。

なお、授賞式のと、東京教育大学名誉教授、成城大教授、西山松之助先生の「竹のことは竹に一円朝のきせる」と題した記念講演が行われた。

第八回冬季研修会近づく

「明日の教育を考える」をテーマに、第八回冬季研修会が、十二月二十五日、二十六日の二日間、岡崎市少年自然の家で行われる。充実した四名の講師の先生をお招きし、本年度は、一泊二日で、各先生方を囲む会を企画している。

講演

十二月二十五日(金) 「世界の学生気質」 名古屋大 学教授、飛田武幸先生 推薦図書 ガウス、ウィーナー、ヒルベルト、レヴィー等

■大樹寺小に文部大臣表彰

学校保健統計調査 十月二十六日、県庁において 賞状の伝達式が行われ、学校保健統計調査の部で、大樹寺小学校が文部大臣表彰を受けた。長年の学校保健調査活動が認められての受賞である。

■ソニー優良賞に藤川小、美川中

藤川小、美川中の両校は、「ソニー理科教育振興資金」に、論文応募したところ、優良賞を受け、十月二十三日、賞状と副賞三十万円を贈呈された。

■私のアイディア貯金箱コンクールに、文部大臣賞

去る十一月二十二日「みんなと私たち」をテーマに盛大に行われた。

■岡崎のハーモニー

第九回岡崎のハーモニーは、去る十一月二十二日「みんなと私たち」をテーマに盛大に行われた。

渡通津の道標



点

所在地 岡崎市渡通津町

駒立行きバスの終点から車一台やつと通れるほどの道を北へ約二キロ、赤松や雑木のトンネルをくぐって進むと峠に出る。海技二五〇メートル、西がぼつと開けて見晴らしがよい。

見わたせば

春はかすみのたなびきて

暮の下なる仁木・細川

峠を越してやや下った所から東の山中へ分け入ると旧道がある。この豪快な歌は、旧道の分かれ道に建っている三尺ほどの道標の西向きの面に刻まれている。南面には足助・前田勘兵衛之立、東面に嘉永二年己酉三月

そして北面に、右をかざき左大谷村（現大柳町）とある。いずれも風化が著しく読みづらい。今でこそ人も通わぬ山道だが江戸の昔は岡崎様が供をひき連れ高月院へ祖先の墓参に通った道である。一行は峠を下り、渡通津の部落でいつも一服したという。

また、この道は足助方面から岡崎へ出る生活の道でもあった。道標の脇、赤松の根方の石室に地蔵様が二体合掌している。この道標はおそらく市内で一番高い所にあるのではなからうか。

●カット

東海中

松井隆一

この本を

- 小説 日本婦道記 山本周五郎 1,700円
新潮社
- 非行に負けない子育て 三上 満 1,200円
続・きびしさの復権 新評論
- 孫育て保爺 平井 信義 880円
小学館創造選書39 小学館
- 日本人が見えてくる本 山川 千秋 720円
主婦と生活社
- いま中学生は 望月 一宏 860円
中央公論社
- 日本語の素顔 外山滋比古 380円
中公新書
- 吉里吉里人 井上ひさし 1,900円
新潮社
- 十八歳の亜米利加 俵 萌子 980円
俵 協子 主婦の友社
- 中学・高校生の数学の成績 国立教育研究所 1,100円
第一法規
- 日本人と「間」 剣持 武彦 1,100円
講談社

“落ちこぼれ”を出さまいと必死になれ
ばなるほど、ゆとりの失せた授業になる。
同じ時間数でも、入試科目にない教科
では、授業をする先生も受ける生徒も、
共に顔つき、ことばにも、どこことなく
“ゆとり”が感じられる。
これからは、外気の寒さと共に我
私の顔つきも厳しくなるだろう。

オアシス

四季各々の花、旬のもの……。
ひと昔前までは、自然の中で生まれ
たものを目にし、口にしてきたが、最
近は促成栽培ばやりのようである。
ところが先日、藤棚下の菅生川堤防に
ムラサキカタバミが二株、ピンクの花を
咲かせていた。これも自然がつくりだし
た小さな不自然である。

アメリカから知人が訪ねて来た。アメ
リカ人に嫁いで三十年、そして二十年ぶ
りに踏んだ日本の土。懐きさでいっぱい
だった。ところが、名古屋の地下街で肩
がぶつかっても知らん顔の人、電車の乗
り方を尋ねても不親切な駅員。「久し
ぶりの日本に失望した」とのこと。
一億が総反省しなければ……。

炭火をおこして火鉢に入れ、手
を暖めながら家族が語り合ったり、
遊びに興じたりしたのも、ひと昔前の
ことである。暖房器具の完備した部屋で、
テレビに見入る時代になろうとは、夢に
も思わなかった。
便利な世の中だが、家族の心の交わり
は、炭火のころの方がはるかに強かった。